

海

第二期

福岡県

個々が独特のオンリーワンを目指す

一、「初期『海』」の終刊と「『海』第二期」の誕生

『海』第二期の創刊は、平成二十一年（二〇〇九）六月である。どうして第二期の誕生となったのか。

初期『海』は、昭和六十二年（一九八七）九月、詩人の織坂幸治が編集発行人となり創刊し、以後二十二年の間に第六十七号までを刊行した。

常に同人・会員三十人以上が集う意気盛んな「熱い思いの文学を語る誌」であったが、第六十五号（二〇〇七年十二月）刊行時に一挙に二十人近くが去る、という大時化に見舞われた。このあたりのいきさつは、当時十五年も在籍していながら、私にも経緯がよくわからない。この二号後の第六十七号（二〇〇八年十二月）をもって、「海」は設立の目的を達成したと発表し、終刊となった。

遠浅の砂場で、のんびり見物を決め込んでいた私が我に返ったのは、「発表の場がなくなったのだ」ということに気付いて、「どうしよう？」と砂場を行きつ戻りつし始めたのだった。そんな動きを（私よりよく知る）発行所であ

る花書院社長の仲西佳文が、織坂や、残った私たち数人をとりまとめる形で、相談の場を設定してくれた。

最初は気乗りのしない態であった織坂も、数度の話し合いの挙句、「やりたければ、やればいい。ただし、君が全部やれ」と、私を指名したのであった。是非はともかく、『海』は第二期（を名乗ることを織坂が了承）として、九人の少数で船出することになった。

話を初期『海』に戻す。それには、織坂幸治という「詩魂の人物」を語らねば始まらない。

織坂は、予科練に入隊したが、やがて終戦となり、十六歳で右足首負傷の傷痍軍人として帰還した。西南学院に復学したものの、昼夜のアルバイトと酒と喧嘩に明け暮れた。もともと読書好きであり、古本屋で織田作之助、太宰治、坂口安吾などに会い、作家になろうと三人の字を一字ず

つもらい、織坂幸治と自ら名乗った。

以降、織坂は作家としてというより、詩人としての道を歩み出した。仕事は、本の卸、印刷会社、屋台引き、映画配給会社、看板屋等々を経て、十年務めた電通を退社し、四十四歳で「珈琲亭ほんくら」を開いた。

当時、「博多春秋」からのエッセイの依頼

があり、ラジオのパーソナリティも務め、詩人としての力を着実に蓄えていった。「ほんくら」には、能古島に住む檀一雄も訪れた。

檀亡き後、文学記念碑建立の計画が出て、檀を無二の人と尊敬する織坂は奔走した。一九七七年に碑が建立され、「第一回花逢忌」となり、今日に至るまで続いている。

「ほんくら」は、文学青年淑女の集まりの場となり、熱心な文学談義が交わされた。織坂は、一九八七年、同人誌の発行を決心した。名前は「海」である。『海は見知らぬ世界への道であり、憧れとロマンの象徴』であるとした。

「評論と詩」を主体とするという、この「海」の趣旨に賛同したメンバーは、荒木力、山口要、柿添元、黄村葉、月岡祥郎、兼川晋、宝生房子、徳永恭子、上野真子、田代茂などだった。後に、有森信二、杉山武子、長野秀樹、武田芳明、牧草泉、赤松健一らが加わった。

『海』の合評会の熱は常に沸騰し、二次会、三次会まで引織坂幸治の言葉「人間は踊ることなしに自己を知ることできない。意識もまた踊ることなしに、言葉を生み出すことはできない。」



『海』第二期同人。左から、上水、高岡、仲西、有森、井本（2017年3月）
右は「評伝・人間織坂幸治」（井本元義著）



き摺るという凄まじいものであったが、「ノースサイドの美学が根底にあり」と殆どの場合、スマートに散会した。

「海」からは、次々に福岡市文学賞受賞者が出た。詩で山口、荒木、月岡、上野、評論で織坂、杉山、小説で有森である。

織坂は、「言葉は、人間にとって風景である」に始まる「言語風景論」を二十二回にわたって連載したが、古典、古今東西文学、古代インド、中国、聖書、現代文学にいたるまでの多くの資料に学び、真摯に考察した人間論である。ともかく、織坂の「海」の統率力と真剣さはとうてい真似ることはできないし、織坂自身多数の本も著した。

二、『海』第二期の歩みと今後

第二期をあずかることになったが、何からとりかかるべきか分からないことだらけであった。第一に、文学・文芸をともに語れる自分がない。となればと、まず「形から入る」ということから始めた。電子情報の活用、ホームページの充実、編集作業の自前化、個々には過度に干渉しない、という他愛ないものである。

原稿の作成・送付・校正などは電子メールを用いることを原則とし、市販の編集ソフトのやり方にならって編集担当者が「印刷用フォーマット」を作成し、割り付ける。事務連絡や外部からの評などの内部への伝達も「交流揭示

表する、安価で」を目指し、自ら「発自安」と呼んでいる。

『海』第二期の発行は第二十六号（「通巻第九十三号」）を数え、個々の向上意識の変化が発行毎に感じとれる。それは、優れた書き手が加わり、その存在をリスペクトするという、初期「海」以来の「真剣に憧れとロマンを求め」新たなハードルを越えようとする、【独特のオンリーワンの考え】が生み出すのではなからうかと思っている。

現在の構成員は、赤木健介、有森信二、井本元義、上水敬由、川村道行、笹原由理、神宮吉昌、高岡啓次郎、仲西佳文、長野秀樹、牧草泉、群青（五十音順）という少数ではあるが、それぞれの力量は水準以上であると見ている。

紙幅の関係もあるので三人に限定し、実績を挙げてみたい。なお今後は、他誌との垣根をなくし、個々の実績をより伸ばし、さらに積み上げていきたいものだと願っている。

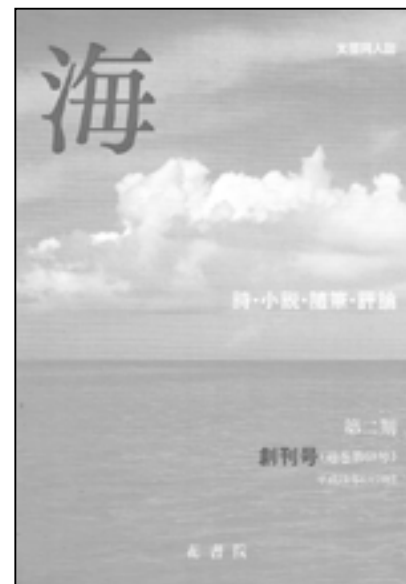
○井本元義

専門は詩であり、作品の鮮やかさには目を瞠る。小説は二十代に新潮新人賞佳作を得たが、家事都合により中断。最近になって始めたというが、詩人の言語感覚が巧みに生かされ、深い心情の表現ができる。

主な賞歴・まほろば賞（第九回「トッカータとフーガ」）、新潮新人賞佳作、福岡市文学賞、フランス語俳句入選など

○高岡啓次郎

斬新な切り口の、かつ、展開の鮮やかな小説を多産する。



『海』第二期創刊号（2009年6月）

板」により行う。編集委員会制度を生きたものにする。

言うなれば、そんなところになる。それらが一朝一夕にできたわけではないし、これがベストだとも思っていない。もっとも精力を注いだのは、視野を広げるために他誌への参加を可にし、文学賞などへの応募も呼びかけた。

次に、「表現する、発表する、到達する、生涯現役、山を移す」というスローガンを設け、【理念、指標など】として、「一、海は文芸作品を発表する場である。二、海は作品を、広く遠くに運ぶ場である。三、海は文芸を志す者同士の交歓の場である。四、海は生涯にわたり文芸にかかわっていくための場である。五、海は同人個々をもつて主人公とする。六、海は文芸を志す者に、広く門戸を開放する」という、どこにでもある目標を掲げたに過ぎない。

これらの考えは極めてシンプルで、「自由に表現し、発



井本の「まほろば賞記念ランプ」
（2015年）

主な賞歴・銀華文学賞特別賞（第十回「凍裂」）、立川文学賞市長特別賞、北九州文学協会文学賞小説部門大賞、長塚節文学賞優秀賞など

○笹原由理

専門は詩であり、作品は四行ないし五行という短いものであるが、宇宙空間を見通しているのではないかという、繊細で深い内容を表現する。

主な賞歴・NHKハート展に毎年のように入選

（文責／有森信二）

『海』第二期

〒818・0101

福岡県太宰府市観世音寺一・一五・三三 松本方

『海』第二期編集発行責任者 有森信二

TEL 090・1976・8119